
自分勝手な彼らの、

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分勝手な彼らの、

【Nコード】

N3091Y

【作者名】

空月

【あらすじ】

いつかのどこかの誰かと誰かの、なんてことのない最後の会話。自分勝手なその人を追いかけるしかないから、それは逃避行にすらならない。置いていくために会いに来た人と、置いて行かれるくらいなら追いかけると宣言する人の話。深読み大歓迎。

「……なんでこんなとこにいるんですか」

「そんなこと言われても」

「まったく、あなたはいつも好き勝手ですね。私の意見も都合も知ったこっちゃないって顔して。私を何だと思ってるんですか」

「ちよつと不器用で寂しがりな頼れる相棒？」

「……どこからつつこむべきか悩みましたが、もうつつこみ放棄します。で？」

「『で？』とか言われても」

「私を、置いていくんでしょう」

「……………」

「お前なら大丈夫だ、とかわけわかんないこと言って、置いていくつもりだったでしょう」

「……………」

「知ってますよ。あなたがそういう人だって。そういう、自分勝手な人だって」

「……そうだな、俺は自分勝手だ」

「だから、私も自分勝手になることにしたんです。あなたがあなたの人生を好きに生きるなら、私だってそうしてもいいですよね」

「え、」

「反対意見は聞きません。聞いても却下です。だって不公平じゃないですか」

「ちょ、待て」

「待ちません。……ねえ、私が望んだのって、そんなに難しいものでしたか。ささやかな幸福だと思いませんか。ただ、ずっと。ずっと……あなたと過ごせたらと、願っていただけなのに」

「……お、まえ」

「何驚いた顔してるんです。わかってはぐらかしてごまかして、知らないふりしてきたのはあなたでしょう」

「……………」

「好きでしたよ。愛しました。いえ、今も。好きです。愛してます。どんな言葉でも足りないくらい」

「……………」

「あなたに救われたあの日から。途切れるはずだった私の生が続き

始めてから。ずっとずっと。あなたにとって、私がそういう対象じゃないってことだつて、知ってましたよ。あなたむっちりした肉感的でセクシーな女性が好きですしね」

「おまつ……！」

「知らないとも思っていました？ 馬鹿ですね。家に連れ込んだ時点でバレバレですよ。というかイイ男についたコブが目障りなお姉さま方が自分から会いに来てくださったこともありますし」

「お前言えよそういうことは！」

「やですよ。告げ口みたいじゃないですか」

「……………！」

「あはは、すごい顔ですよ。……私のことで、そういうふう to 動揺するあなたを見るのが、好きでした。大切にされてる、みたいで」

「みたい、って——」

「実際、大切にしてくれてたのは知ってます。私には、過ぎるくらい。なんのメリットもないのに私を引き取って、育ててくれただけでも感謝に尽きないのに」

「だから、そういう言い方やめろって……」

「ええ。あなたはいつも言っていましたね。負い目を持つ必要なんてない。他の誰が何と言おうと、お前は俺の大事な子どもだつて。嬉しかったですよ。嬉しかった。……それだけでいいと思えなかった

私が、愚かだったんです」

「……………」

「叶わなくてもよかった。あなたは私の気持ちには応えてくれなかったけれど、それでも大切にくれたから。私が望めば、きっとずっと一緒に居てくれたでしょう?」

「……ああ。だろうな」

「本当にあなたは、甘い……」

「……………」

「……だから、こんなことになるんですよ。あなた自身は後悔なんてしてないんでしょうけど、自分が周りに与える影響くらい考えたらどうですか」

「それは……………」

「天然タラシってこういうとき駄目ですよ。駄目駄目ですね。自分がどれだけ慕われてたのか、気付いてないわけじゃないでしょう」

「——後を追おうだなんて思う奴はそうそういないだろ」

「さあ? どうでしょうね。少なくともここに一人いると思ったから、あなたはここに来たんじゃないんですか」

「……………わかってるならついてくるなよ」

「……この期に及んで釘を刺しに来たとは思いませんでした。あなた、私が思ってたより馬鹿だったんですね」

「駄目だの馬鹿だの、散々な言われようだな俺」

「言われるような言動をするからですよ。……まあ、私も馬鹿ですね。あなたがそういう人だってわかって、それでも止められなかったんですから」

「……」

「きちんと別れを言えば私が思い留まるとでも思いましたか？ 残念でしたね。自分勝手なあなたの思い通りになんてなってあげませんよ」

「……お前、こういうとき頑固だよな」

「ええ。あなたが一番よく知ってるでしょう？」

「知ってるよ。知ってるから、予防線張りに来たってのに」

「……会えなくても追いかけるつもりでしたけど、会えて嬉しかったですよ。これが夢でも幻でも、構わないくらい」

「夢でも幻でもないっつの。……仕方ないから、待っててやるよ。一人は寂しいだろ？」

「あなただって。本当は、誰よりも寂しがり屋じゃないですか」

「お前には負けるって」

「いいえ、あなたの方が上です」

「いや絶対お前だね。この意地っ張り」

「自覚がなかったとは思いませんでしたよ。イイ歳して認めるのが恥ずかしいんですか？」

「……………」

「……………」

「……お互いさまってことにしとくか」

「……仕方ないですね。それで譲歩してあげます」

「……………本当にいいのか？ お前まだまだこれからってところだろ」

「いいんですよ。これが私の選択ですから」

「……後悔しても知らないからな」

「あなたが後悔してないように、私だって自分が後悔する選択肢を選ぶつもりはありませんよ。というかいい加減しつこいです」

「しつこいって、お前なあ……………！」

「だって、待っててくれるんでしょう？」

「……ッ！」

「待つてくれるなら、どこにだって行きますよ。それがたとえ世界の果てでも地獄でも。……まあ、あなたが地獄に行くとは思えな
いですけど。むしろ私があると同じところに行けるか心配するべ
きですかね」

「……そんなこと、ないだろ」

「どうでしょうね。どちらにしろ、あなたを追いかけるのには変わ
りないですし」

「……お前も結構な馬鹿だよな」

「ええ。あなたに似たんですよ、きっと」

「そうか」

「そうですよ」

「……ああ、そろそろ時間か」

「みたいですネ。じゃあ、また。すぐ追いかけますから、首洗って
待つててください」

「その台詞、なんか違うだろ」

「そうですか？ 馬鹿なことやった馬鹿な人に向けるには最適な言
葉だと思いますよ」

「……何するつもりだよお前……」

「それはまた会ったのお楽しみです」

「滅多にねえ笑顔をこんなところでふりまくなよ。怖いだろうが」

「失礼ですね。あなたにあまり向けないだけですよ。私外面はいいんですから」

「そんな自慢げに言うことじゃないだろ」

「ああ、もう。一応お別れなんですから、もっとそれらしくできないんですか」

「お前に言われたくないっての。……でも、まあ、確かにそうだな。そもそも俺、お前に言いたいことがあったから来たんだし」

「……言いたいことってなんですか」

「お前と暮らせてよかった。お前がちゃんと生きてくれてよかった。……笑えるようになってよかった。泣けるようになってよかった。ずっと一緒に居てやれなくて悪かった。——って、言うつもりだったんだけどな。こんなことでもないと言えないっての、ンなクサイ台詞」

「大半が無駄になりましたね。しかも何ですかその内容。覗き見してたんですか。趣味悪いですね」

「不可抗力だって。見えちゃったもんは仕方ないだろ」

「……まあ、いいですけど」

「照れんなって」

「照れてません。……時間、なんでしょう」

「ああ、……さすがにこれ以上粘れそうにないか」

「そんなに粘らなくても、すぐ追いかけますから。待っててください」

「別に思い直してくれても俺は全然構わないんだけどな？」

「本当しつこいですよあなた」

「冗談だって。……じゃあ、またな」

「ええ、また」

「……………」

「……すぐ、行きますよ。会えるかどうか知らなくても、あなたが本心では望んでいなくても。それが私の——選択、ですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3091y/>

自分勝手な彼らの、

2011年11月15日02時03分発行